



キーワード 地方創生、官民連携、森林・里山活用、水辺の保全・再生、食、ブランド化、観光

フィールド 中部地方 (三重県) ・ **森海**

実施体制 実施主体：有限会社OZ、協力団体：鳥羽磯部漁業協同組合、鳥羽市エコツーリズム推進協議会（観光事業者、観光関連団体、産業関連団体、行政で構成）



アクションの目的

伊勢志摩国立公園の沿岸、及び離島で行われるエコツアーの持続

アクションの背景

2001年、地元旅館の女将が、4つの有人離島をはじめとした鳥羽の魅力伝えるため、離島の文化と自然体験をプログラム化する「海島遊民くらぶ」を立ち上げた。
2009年、市の観光基本計画のアクションプログラムにて、エコツーリズム推進協議会の設立を目指すことが示された。1年2か月の間、鳥羽のエコツーリズムの在り方について議論し、2010年、「連携と循環」鳥羽市エコツーリズム推進協議会が設立された。

アクションの内容

○海島遊民くらぶでは、エコツアー実施にあたり、フィールド利用の際の自主ルールを策定している。「島でのルール」と「磯場での磯観察ルール」があり、例えば下記のようなものがある。
- 磯場の生き物を持ち帰らない。【島でのルール】
- 浮島上陸はガイドを除いて1日1回30人まで。【磯場での磯観察ルール】
- 同じ磯場に3日より多く続けて入らない。【磯場での磯観察ルール】
○沿岸漁業では前浜の漁場のモニタリングや保護、再生の役割を担っているが、市のエコツーリズムではこうした生業の継承や発展に尽力することで、自然資源の守り手に対する認知度の向上につながっている。

アクションのポイント

◎鳥羽磯部漁協本所との連携の他に、管内にある合併以前の漁村ごとに22支所のうち、現在7か所の支所と連携している。その際、それぞれの漁業種類やそれによる漁師のライフスタイル、コミュニティの文化に合わせて連携形態を工夫している。
◎伝統的な漁業は自然資源の保全に寄与しているとする観点から、漁業一般の問題と各漁村の抱える課題を明確にし、観光によってアプローチしている。たとえば、資源管理やコミュニティによる活性化の取組に精力的な答志島答志支所では、こうした漁業の取り組みへの理解をテーマとし、市場の見学時の解説の工夫を行ったり、市場関係者や仲買人からの解説を聞く機会を設けている。一方、答志島の和具支所では、サワラの一本釣りや塩蔵わかめの製法など、漁業者が当たり前に行っている手間を付加価値化することをテーマとし、港周辺での作業風景や漁民との出会いを演出している。
◎地域の小学校の協力のもと、島の自然の特徴や生活文化のつながりを調べ、観光客等に案内や発表を行う「しまっこガイド」の育成を行い、子どもたちが地域への誇りを持つことにつなげている。海外からの視察も行われている。

アクションの効果と今後の展開

○菅島の「島っ子ガイド」の子どもたちの取組により、自主的な大人や地域の取組への派生している。また、鳥羽市内の他の離島である神島でも「神島っ子ガイド」が始まった。また、さらに全国的にも共感した長崎県立大学教授や地域の若者が取り組み始め、山梨県北杜市や長崎県平戸市度島、奄美大島でも、島っ子ガイドや子どもガイドの取組が始まっている。
○外部評価が高まったことで、国内だけでなく、各国からのエコツーリズム視察や研修が増えている。それに伴い、エコツーリズム研究の留学生のインターン受入やエコツーリズムを学びたい外国人の雇用にもつながっている。
○平成27年度より、鳥羽市・漁協・観光協会による三者協定が結ばれ、「漁観連携」のプロジェクトが開始した。漁業にとって、これまで信頼の薄い鳥羽の観光業界と漁業をつなぐ架け橋となっている。
○サミット時を機会に、日本の地方に埋もれている多くの知恵のストックをテーマとした世界からのプレスツァアのコーディネーターの役割が見出された。
○人材育成の幅を広げ、地域の人材だけでなく、世界からのエコツーリズムの視察研修対応を通して、世界のエコツーリズム標準を見出しながらも、日本のエコツーリズムの独自発展による他国のエコツーリズムに寄与していきたいと考えている。